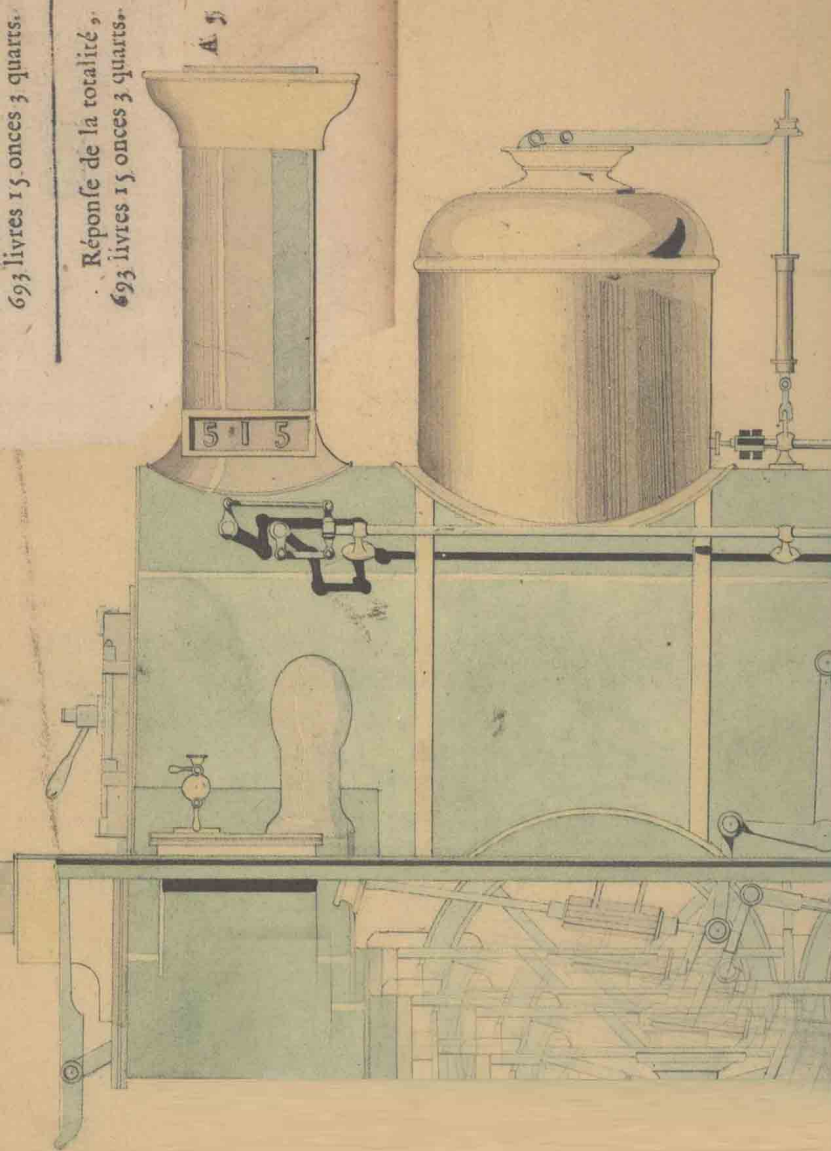


693 livres 15 onces 3 quarts.

Réponse de la totalité,
693 livres 15 onces 3 quarts.



機械のある世界

ちくま文学の森 11

筑摩

機械のある世界へちくま文学の森11

一九八八年十一月二十九日 第一刷発行

編者 安野光雅（あんの・みつまさ）

森毅（もり・つよし）

井上ひさし（いのうえ・ひさし）

池内紀（いけうち・おさむ）

発行者 関根栄郷

発行所 株式会社 筑摩書房

東京都千代田区神田小川町二一八 ☎ 〇一〇一九一

電話東京二九一一七六五一（営業）

二九四一六七一一（編集）

振替口座東京六一四一二三

装本 安野光雅

印刷所 三松堂印刷

製本所 鈴木製本所

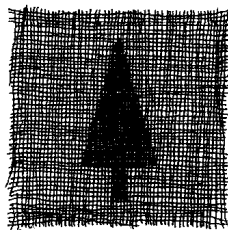
本書の定価はカバーに表示してあります。

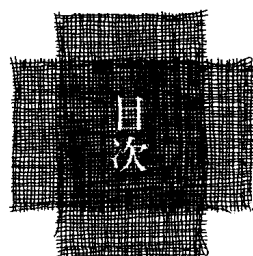
落丁本・乱丁本はお取りかえいたします。

©M. ANNO T. MORI H. INOUE O. IKEUCHI

1988 Printed in Japan

ISBN4-480-10111-X C0393





目次



引力の事

.....

福沢諭吉 2



私の懷中時計
かいちゅうどけい

.....

マーク・トウェイン 古沢安二郎訳 7

時計のネジ

.....

椎名麟三 15

メカに弱い男

.....

サーバー 鳴海四郎訳 25

自転車日記

.....

夏目漱石 35

瞑想の機械
めいそう

.....

ボンテンペルリ 柏熊達生訳 51

怪夢抄
かいむ

.....

夢野久作 63

シグナルとシグナレス

宮沢賢治 77



ナイチンゲール

.....

アンデルセン 大畑末吉訳 103

両棲動力

.....

A・アレー 山田稔訳

.....

125

栄光製造機

.....

ヴィリエ・ド・リラダン 斎藤磯雄訳

.....

131

流刑地にて

.....

カフカ 池内紀訳

.....

157

To the unhappy few

.....

渡辺一夫

.....

205



メルツェルの将棋差し

.....

ポー 小林秀雄・大岡昇平訳

.....

217

金剛石のレンズ

.....

F・オプライエン 稲葉明雄訳

.....

253

フェッセンデンの宇宙

.....

E・ハミルトン 稲葉明雄訳

.....

295

実験室の記憶

.....

中谷宇吉郎

.....

323



操縦士と自然の力

.....

サン＝テグジュペリ 渡辺一民訳

.....

335

軽気球

.....

ラーゲルレーヴ 山室静訳

.....

357

蓄音機 ちくおんき

.....

寺田寅彦
.....

393

天体嗜好症 しこうしょう

.....

稻垣足穂
.....

415

夢みる少年の昼と夜 ゆめ

.....

福永武彦
.....

431



機械について

解説にかえて

.....

森 毅

.....

484

機械のある世界

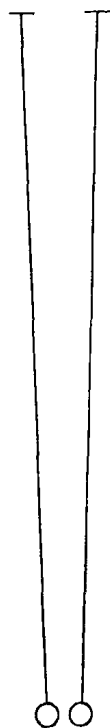
引力の事

福沢諭吉

引力の感る所至細なりまた至大なり
近は地上に行われ遠は星辰に及ぶ

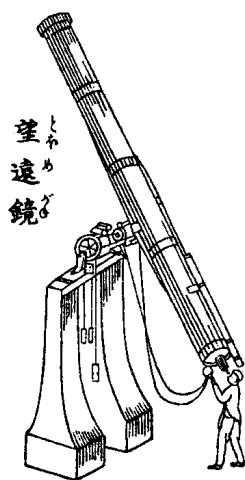
物は物とたがいに相引きたがいに相近かんとするの力あり。これを引力という。およそ世界中の万物、その大小にかかわらず、この引力を具えざるものなし。されば今玉を二個並べ置けば、たがいに相引て一処に近寄るべきの理なれども、決して然らず。そはなにゆえなりやと尋るに、この地球の事の大なること格別なるものにて、世界中の万物を一に合するとも、これを地球の体に較れば九牛が一毛にも足らず。ゆえに世界の面にある物と物とはたがいに引の力あれども、大なる世界の引力には克ずして、皆地球の方へとのみ引付けられ、その物に具たる少ばかりの力をば自由にする

こと能わざるなり。今その証拠を見んとすれば、数十丈の高き処より糸にて二個の玉を下げなば、その糸は真直に下らずして、玉と玉

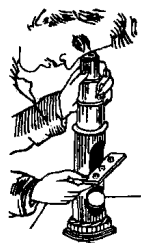


に、始終日輪を飛離れて去らんとする力あり。右のごとく求心力と遠心力と二様の力にてたがいに持合い、これによりて日輪の周囲に世界廻り、世界の周囲に月輪の廻るなり。図を見てその大概を合点すべし。この図にてまず中心を日輪とし、(い)(は)(ほ)(と)を地球とすれば、日輪は常に地球を中心に引付んとせり。すなわち求心力なり。然るに地球は日輪の周囲を廻る勢にて、常これを離れんとし、たとえば(い)印の処にて日輪の引力絶なば(ろ)の方へ真直に飛び、(は)の処なれば(に)の方へ飛び、(は)より(へ)に飛び、(と)より(ち)に飛び、必ず際限もなくただ一方へ駈出すべきはずなり。すなわちこれを遠心力という。かく日輪は引付んとし、世界は飛離れんとし、引くと離るると二の力によりて、世界はその間の路を通りて円く廻るなり。すべて物を円く廻してその元の力の縁を絶てば、その物は必ず真直に飛ぶものなり。その証拠を見んには、試に糸に小石を結付、糸を廻して勢の付たる処にてその石を放せば、石は必ず真直に飛ぶべし。物の大小は異なれども理合は同じ。

空々茫々たる広き天に、数限もなき星の列りて、開闢の始より今日に至るまでその行列を乱ることなきは、皆引力の致す所なり。星にも種類ありて、遠きものを恒星といい、近きものを遊星という。恒星の遠きこと幾億万里という限なし。かの銀河と唱るものも星の多く重りたるものにて、よき望遠鏡をもて見れば一個ずつよく分るなれども、望遠鏡なしにては、あまり遠くしてその見分出来難く、ただ白く見るのみ。さて古人は日輪を太陽といい、星を小陽と唱えて、星は小さきもののよ



顕微鏡



の光を受て耀くのみ。すなわちこの世界も一個の遊星なれば、他の遊星より我地球を望見れば、やはり星のごとくに見ゆべし。

そもそも造化天工の大なること人力をもつて測るべからず。一通り考れば、日輪は高し、月輪は遠しなどと思うなれども、前にもいえるごとく、日輪の外にまた日輪ありて、その数幾百万なるを知らず。その遠きこともまたたとえんかたなし。恒星の内にて最も近きものの里数を測りしに、百万、千万、一億と計えその一億を七千八百五十合せたる数なり。十露盤の桁にすれば、一の数より十五桁上の数に当る。銀河の高さなどに至りては億兆の数にて、とても測るべからず。洪大といわん、無辺とやいわん、これを考えても気の遠くなるほどのことなり。さてまた造化はかく大なるものかと思えば、またその細なる仕事に至ても人を驚かすに余あり。蚤の足に毛あり、蚊の脚に節あるとも、これを見て驚くに足らず。西洋人の発明にて顕微鏡というものあり。この目鏡にて見れば物の微細なるもまた限なし。水の中に虫あり、酢の中に虫あり。一本の絹糸と思うものも、細なる線の百条も集りたるものなり。一滴の池の水を見れば千百の虫あり。その虫の細なること、一万の数を集るとも粟粒粒の大きさに及ばず。されどもこの虫も生て動くものなれば、口なかるべから

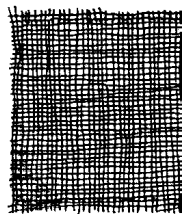
ず、臟腑^{ぞうふ}なかるべからず。その体内脈筋などの微細なることは、更に思案^{しあん}にも乗らざる所なり。

右は天文^{てんもん}にかかわらざることなれども、いささかここに造化^{れいみょう}の洪大靈妙なる証拠^{あぐ}を挙るのみ。されば日月^{にげつ}の照^{てら}し、四時昼夜^{しつてん}の變化を成すも、人力をもつて考うれば不思議なれども、造化の大仕掛^{たいしやく}に較^{くら}るときは、ただ一端^{いつたん}の仕事なるべし。左の条々にはまた天文の大略^{たいりやく}を記し、四時昼夜等の理^りを説^せき、もつてこの冊子^{さうし}の結末^{けつまつ}となす。ただしこの篇^{へん}に天地窮理^{てんちきうり}の大概^{たいがい}を記したれども、地震^{じしん}、雷^{かみなり}、虹^{にじ}、彗星^{ほうせい}等の説なし。こは我社中小幡氏^{おぼたうじ}が著述^{しやくしゆ}に天変地異^{てんへんぢい}という書ありて、これに委^{くわ}しければわざとここに略したるなり。(訓蒙窮理図解・卷の三 第七章)

私の懐中時計

かいちゅうどけい

マーク・トウェイン
古沢安二郎訳



マーク・トウェイン Mark Twain 一八三

五—一九一〇 アメリカ・ミズーリ州のフロリダ生まれ。本名サミュエル・クレメンズ。幼い頃にミシシッピー河畔に移る。十二歳の時に父を失い、印刷屋の徒弟、ついでミシシッピー河の水先案内人。やがて才筆を認められて新聞社に就職、水夫用語で「二ひろの深さ」を表わすベンネーム・マーク・トウェインによって次々と諧謔あふれた短篇を発表、当代きってのユーモア作家となった。「トム・ソーヤーの冒険」「ハックルベリー・フィンの冒険」「王子と乞食」が有名。ほかに多くの諷刺物があり、晩年の作は暗鬱な、人間不信の傾向を示している。

(原題 My Watch)

私の美しい新しい懐中時計かいちゆうとけいはもう一年半も遅れおくもせず進みもせず、機械のどこにも故障はなく、また一度も止まったこともなく動いて来た。私はこの時計の知らせる時間には絶対に間違いないし、造りも機械もどんなことがあってもこわれることもないと信じるようになっていた。ところがある日の晩とうとう私はこの時計を止まらせてしまった。それがまるで災難でもはつきり知らせに来た使者か前触まえぶれかなどのように私を悲観させた。しかしやがて私は元氣を出し、当てずっぽに時間を合わせ、そんな前兆や迷信は強いて追い払はらってしまった。翌日私は正確な時間に合わせようと思つて一流の宝石時計店に足を運んだ。するとその店の主人は私の手から時計を奪うばい、私にやらせないで自分で時間を合わせにかかった。そして主人は言った、「この時計は四分遅れていますな——緩急針かんきゅうはりを押おし上げる必要がある。」私はやめさせようとした——時計の時間はきちんと合っているのだということを主人に判らせようとした。しかしだめだった。その間ま抜け野郎には時計が四分遅れているということと、どうあつても緩急針を少し押し上げなければならんということしか判らなかつた。だから私がどんなにいらいらして主人のまわりを歩き回りながら時計に手をつけないでくれと頼たのみこもうと、相手は落ち着き払はって無残にもけしからん直し方をしてしまった。私の時計は進みはじめた。日増しにどんどん進むようになった。一週間もたたないうちに時計は猛烈もうれつな熱病

にかかつてしまい、脈搏は日陰で百五十に上った。二カ月の終わりころになると、この時計は町中のあらゆる時計をはるかに追い越してしまい、カレンダーより十三日と少しばかり行き過ぎてしまった。まだ十月の木の葉が紅葉しているというのに、時計のほうはとうに雪を楽しむ十一月にはいっていった。お陰で家賃や払いの勘定やそういったものにせき立てられ、それがひどく懐にひびくのでとうてい辛抱しきれなくなった。私は直してもらおうと時計専門の店へ持ち込んだ。主人は今まで直したことがあるかと尋ねた。ない、今までちっとも直す必要はなかったのだと私は答えた。主人は意地悪い満足そうな表情をうかべて懸命に時計をこじ開け、やがて小さな筒眼鏡を目に当てて機械を覗きこんだ。これは修理だけではなしに分解掃除をして油を注さなければならん——一週間したら取りに來いと主人は言った。分解掃除と油注しをして修理してもらった時計は、こんどはすっかり遅れるようになり、教会の鐘のようにゆっくり時を刻んでいた。私は汽車には乗り後れるようになり、すべて約束の時間には間に合わず、夕食も食べそこねるようになった。時計のお陰で借金を支払期限の猶予の三日が四日に延びてしまい、言い訳に出かけさせられてしまった。次第に私は昨日に舞い戻り、やがて一昨日に戻り、やがて先週に戻り、そのうちに自分だけがぼつんと独りっきりで先々週をうろろして世の中に取り残されてしまったことが判って來た。私は博物館のミイラにひそかに同胞感をいだき、ミイラと世間話をしたという望みを持つ気持ちになつたらしいことに気がついた。私はまたべつの時計店へ出かけて行つた。時計屋は私の待つてゐるあいだに機械を全部ばらばらにしてみ、やがてぜんまいの香箱がふくれていると言つ